群馬県訪問看護ステーション連絡協議会だより

たいよう

平成26年６月10日

第19号

発　行　群馬県訪問看護ステーション連絡協議会
群馬県医師会内
住　所　〒371-0022
前橋市千代田町一丁目7－4
TEL　027-231-5311
FAX　027-231-7667
http://www.gunma.med.or.jp/houmon/
責任者　月岡鬨夫

会長就任に寄せて

群馬県訪問看護ステーション連絡協議会　会長　月岡　鬨夫

昨年11月に鶴谷前会長の急逝を受け思いもかけず群馬県医師会長に就任しました月岡鬨夫です。この度、群馬県訪問看護ステーション連絡協議会の会長にも就任させていただきました。

群馬県訪問看護ステーション連絡協議会が設立されたのは平成9年のことで、当時県医師会の介護保険担当理事であった鈴木憲一先生が、これからは施設から在宅中心の医療になっていく、それを支えるのは医師と訪問看護師であるとの考えで、訪問看護ステーション連絡協議会の事務局は県医師会内にとの強い思いで設立に尽力されたのだと記憶しております。設立当初の会員は40ヵ所程度で現在109ヵ所までに増えたと聞きました。今や訪問看護ステーションは在宅医療、介護において中心的役割を担っており、まさに先見の明があったといえるでしょう。

連絡協議会では毎年様々な研修を行っていると聞いております。訪問看護ステーションが増えてくればステーションや看護師によって技量に差が出て来ることがありえます。研修や情報交換によってステーションの底上げを図っている連絡協議会の活動に大いに期待すると共に、時機にあった研修を企画する役員の方々に敬意を表する次第です。

群馬県医師会としては連絡協議会と強固な信頼関係のもとに、今後とも連携を密にしていきたいと存じますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

群馬県訪問看護ステーション連絡協議会の会員の皆様には、在宅医療・介護を支える大きな柱であることを自負していただき、今後より一層のご活躍を心からお祈りしています。

講師の立場として

群馬大学大学院保健学研究科　准教授　内田 陽子

在宅ケアは利用者を中心として、家族、ケアマネジャーの他、他職種者等、多様な人種が有機的に連携・協働しあうことで成り立つ。連携・協働という言葉は、良い響きを醸し出すが、実は共通理解のための努力が必要で、かつ困難を伴う。最新の論文によると、訪問看護師は「ケアマネとの情報共有のむずかしさを感じている。特に看護師のアセスメントの伝わりにくさと情報伝達のタイミングのずれが発生している」[1]との報告がある。理想とはかけ離れ、在宅ケアの現場では、連携にまつわる泥臭い問題が渦巻いている。極端に言えば、多様な人種がそれぞれの言動や価値観のもとに話をし、自分中心にケアを考えていることが一因である。

今回の研修は大学教員の一方的な講義ではなく、訪問看護師とケアマネが本音をぶつけ合う機会をつくることが即策だと考えた。参加者は予想を超えて集まり、関心の高さがうかがえた。「ひょっとすると変わるかも？」と胸が高まった。訪問看護とケアマネの混在した班でのグループワークは、多数の課題回答を短い時間で数多く出すことを求めた。いろいろ思考回路を巡らせては本音は出ない。実際、「看護師はきつい。」「ケアマネはもっと勉強してほしい。」といった発言も出て、会場は沸いた。本音が出た後、「待てよ。互いに悪いところばかりでよいのか？良い点はないのか？私達が歩み寄る点はないのか？」という段階に移行した。それぞれの違いを受け入れ、得意な力をかりて欠点を補う。まさに、訪問看護とケアマネの連携により、相乗効果を生む可能性を皆が感じたはずである。わが国は、政治経済において他国との交渉や連携に困難を抱え、まさに危機に直面している。在宅ケア分野も超高齢化、厳しい財政、人員不足等と前代未聞の危機を迎えている。やっかいな医療ニーズや複雑な問題を抱える利用者の問題解決のために訪問看護とケアマネの互いの理解がそれを救う鍵となるに違いない。

1）依田純子、佐藤悦子、泉宗美恵、他、訪問看護師がもつ介護支援専門員との連携の困難性と課題の構造、日本地域看護学会　16（3）、p13-21、2014

訪問看護師として研修会に参加して

伊勢崎佐波医師会病院　訪問看護ステーション　丸橋　和代

今回の研修は、訪問看護とケアマネジャーの連携という事で、6個の課題をKJ法でグループワークをしました。研修中も活発な意見交換がされ、相互の普段なかなか知る事の出来ない部分や参考となる意見も多々聞くことが出来、良い情報交換の場となりました。

上手に連携するコツは、担当者会議や同行訪問、電話連絡などでお互い連絡を密にとり情報を共有することで、利用者・家族を中心とした援助方針や支援のあり方を考えることができるのだと思いました。また、それぞれお互いの役割を尊重したうえでコミュニケーションを図り、信頼関係を深めていくことにより、最強のパートナーになると思いました。今回の研修で学んだ連携戦略を生かし、利用者・家族が在宅で安心して過ごせるよう関わっていけたらと思います。

ケアマネとして研修会に参加して

特定非営利活動法人　妙義会　妙義会居宅介護支援事業所　飯ケ浜　一美

内田陽子先生の講義とのことでおもしろい、いや、業務に役立つ話しが聴けると思い参加しました。

2月の大雪の翌週の開催にもかかわらず、多くの訪問看護師、ケアマネの参加には、今回の研修への期待の大きさを感じさせられました。期待に反してのグループワークでしたが、それはそれは中身の濃い意見交換でした。サービスを依頼する側、提供する側それぞれの意見のぶつかり合いもありましたが、利用者様を思うからこその意見と感じ、また医療とも連携において訪問看護師の存在の大きさを再認識しました。

まとめの意見に挙がっていた、ケアマネに医療的知識を求めているということが今後の課題となりました。

毎年、群馬県訪問看護ステーション連絡協議会では、参加者同士ゆっくり話しをする時間をつくってもらいアドバイスをいただける機会にもなっています。今後も、是非参加させていただきたいです。ありがとうございました。

平成26年度　研修会の予定

第１回　日　時：平成26年９月20日（土）14：00
　　場　所：群馬メディカルセンター　大ホール
　　演　題：「高齢者の終末期ケア　在宅でのリビング・ウイル」
　　講　師：群馬県看護協会訪問看護ステーション老人専門看護師　梨木 恵実子 先生

第２回　管理者研修　11月または12月開催予定

第３回　スタッフ研修予定　12月または１月開催予定

第４回　交流研修　３月頃開催予定

※都合により、日程・内容等変更する場合がありますのでご了承ください。

「災害に備えるためのアンケート」の結果・考察

災害時に連絡網がどの程度効果があるのかを検証する為、今回アンケートを利用して実際に行ってみまし

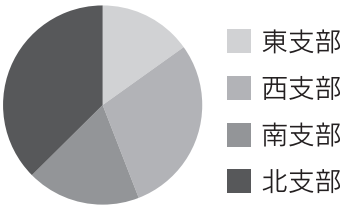
〔方法〕

1．事前に各支部長宛にアンケートのお願いを行う別紙を送信し、3月の第1週目に別紙資料1を連絡網で伝達してもら
2．3月11日（火）に別紙資料2を連絡網で伝達してもらう
3．返信されたアンケート用紙をまとめ、3月19日までに医師会事務局　担当者へ郵送してもらう旨をお願いする

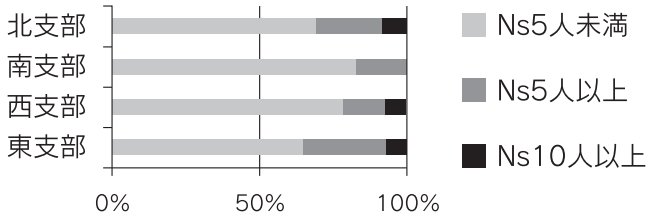
■ 結果・考察

支部名	回答数	Ns5人未満	Ns5人以上	Ns10人以上	人工呼吸器	在宅酸素	吸引機
東支部	14	9	4	1	33	55	84
西支部	27	21	4	2	50	86	96
南支部	17	14	3	0	27	40	72
北支部	35	24	8	3	57	119	151

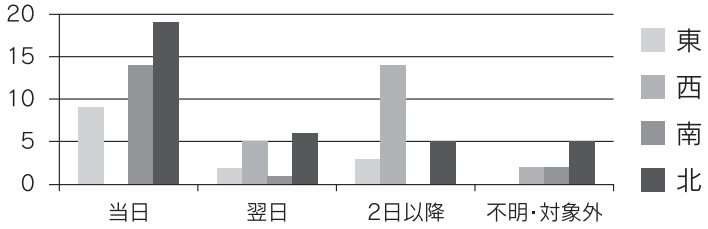
■ 回答率



■ ステーション規模



● アンケート返信について：当日の返信42件、翌日以降の返信35件、不明・対象外の返信6件

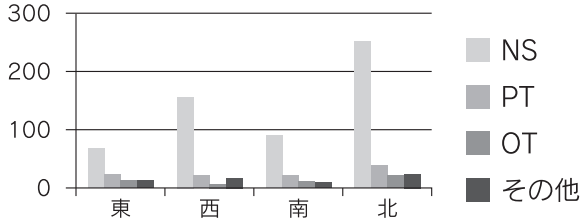


当日返信は全体の45%
翌日以降の返信は全体の38%
不明・対象外は全体の6%

指定日の送信間違いがあったり、連絡網での伝達に対し遅延がみられる。また返信がないステーションに関しては、伝達されなかったのか数件不明もみられる

● 連絡網に関して、各支部でのやり方が違い、1ステーションから各ステーションに伝達する方法と連絡網を使い上ら順に各ステーションに伝達する2種類のパターンがみられた。可能であれば、一箇所からの情報発信を各ステションが受け取れると、FAX伝送時の文章の擦れによる見にくさや伝達遅延が生じないと考えられる。

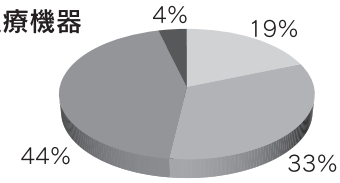
■ ステーションに勤める職員数　※（　）内の数字は常勤換算



看　護　師：569名（413.5）…（全体職員の）72%
理学療法士：103名（88.4）……（　〃　）13%
作業療法士：　52名（35.4）……（　〃　）　7%
そ　の　他：　65名 ……（　〃　）　8%

その他の職員には言語療法士や事務員が含まれており詳細が不明である。

■ 医療機器



人工呼吸器　吸引機
在宅酸素　その他（吸入器、カフアシスト、輸液ポンプ、腹膜透析）

編集後記

今年の冬は交通網が麻痺する程の大雪となり、訪問に支障があり、四苦八苦したといった事業所もあったのではないでしょうか。震災の時と同様に普段の備えが必要であると痛感しました。

医療、介護の現場においては、今年度診療報酬の改定があり、「在宅医療の充実」を目指した内容となっています。訪問看護もサービスの担い手となるよう他職種との連携を強化し、質の向上に努めていきたいと思います。